O7-6

交通外傷による遷延性意識障害患者に対しての腹臥位療法の効果

Prone position therapy for the patients with prolonged consciousness disturbance by traffic accidents

寺田　麻耶、森近　正和、大本　吉志子、金田　憲司、八木　良子、塩田　真由、北村　吉宏、高橋　和也、衣笠　和孜、西本　詮

自動車事故対策機構　岡山療護センター

Maya Terada、Masakazu Moritika、Yoshiko Omoto、Kenji Kaneda、Yoshiko Yagi、Mayumi Shiota、Yoshihiro Kitamura、Kazuya Takahashi、Kazushi Kinugasa、Akira Nisimoto

National Agency for Automotive Safety&Victims'Aid Okayama Ryogo center, Okayama, Japan

【はじめに】当センターの患者は、頭部外傷による遷延性意識障害、運動障害などにより長期臥床を強いられ、廃用症候群を併発しやすい。脳血管障害患者の関節拘縮・意識障害に対する腹臥位療法の治療効果に関する報告は過去にもみられる。今回、我々は交通外傷による遷延性意識障害患者にも同様の効果が得られるかどうかを検討した。【方法】入院患者6名(完全型植物症3名、不完全型植物症1名、移行型植物症2名)を対象とし、腹臥位または半腹臥位を10分間から開始、患者の状態を見ながら40分間まで延長して1日1回2ヶ月間施行した。経過中は関節可動域測定、状態・反応スケールにて運動機能及び神経症状の変化を評価した。【結果】関節拘縮：全例で肩関節・手関節・股関節・膝関節・足関節いずれかの関節可動域の拡大を認めた。意識レベル：腹臥位療法施行中は全例において緊張亢進・バイタルサインの変動は認めなかった。植物症分類、状態スケール、反応スケールに大きな変化は認めなかったが、移行型植物症の1名は合目的運動を認めるようになるなど、一部改善もみられた。その他、腹臥位療法施行前後で痰の喀出頻度が増加する等の変化も認めた。【結論】腹臥位療法は遷延性意識障害患者の関節の拘縮予防効果を認めた。